

その他の消費者世帯の栄養摂取量は日雇・家内労働者世帯に次いで悪く熱量、蛋白質、脂肪は日雇・家内労働者世帯に次いで少ないが、カルシウムの摂取量は413ミリグラムで業態中最も多い。

対前年比をみると熱量は大差ないが蛋白質、動物性蛋白質、鉄、ビタミンB₁は1.3%、1.1%、7.1%、10.5%と後退しこの世帯の栄養水準も伸び悩みの状態にある。

その他の世帯

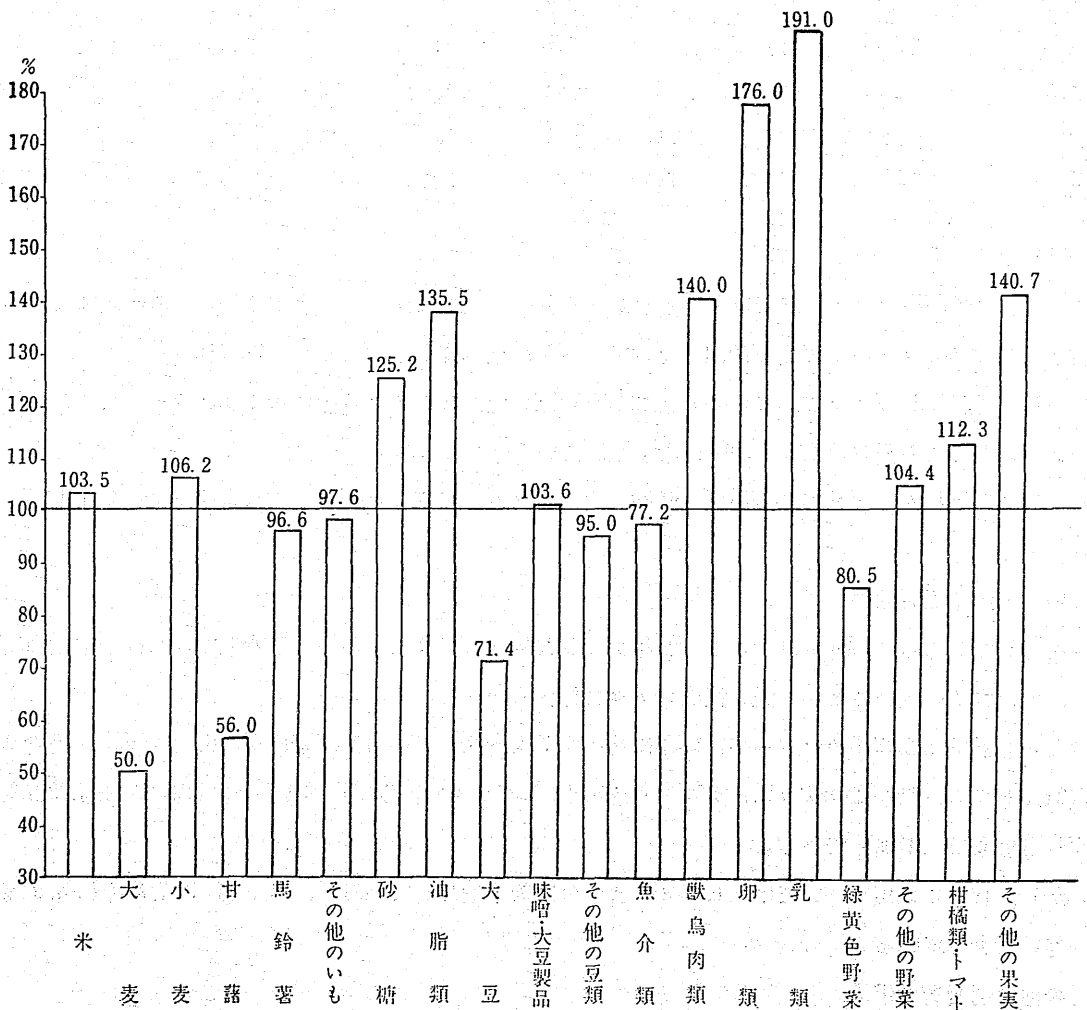
この世帯は熱量、蛋白質の摂取量は前年と大差はないが、動物性蛋白質、脂肪、カルシウム、ビタミンAは前年に比べて5.0%、10.4%、1.3%、1.4%といずれも増加しているもののビタミンB₁、Cは2.8%、6.3%と減少している。

総じて栄養水準は生産者世帯と消費者世帯の中間にあり一般に低い状態にある。

2. 食品群別摂取量

この数年わが国の食生活水準は栄養量はともかく食糧消費の面で、国民所得の向上や生活水準の上昇に伴ない、穀類、いも類偏重の消費形態から漸次抜けだして、畜産食品、油脂、果実、洋菜類、その他嗜好食品、飲料等の消費が、増大の傾向にあったがこの1～2年は、所得の増加分は食料費以外に大きく向

第3図 最近数年間の食品摂取量の推移
(昭和32年=100)



けられるようになり又必需的な食料品の値上りに影響されてか、食糧消費構造の変化のテンポは鈍化してきている。

すなわち、昭和36年度の食糧消費状況をみると前年に比べ、穀類は、総量として減少しているが、米の摂取量は若干増え、また前年まで大きい伸びを示していた油脂類、卵類、乳類等の伸びは非常に小さく、魚介類、その他の野菜類および柑橘類・トマト等の食品は減少を示している。

特に前年度において若干改善の傾向をみせた生産者世帯では、前年に比べ米の摂取量の増加が目立ち依然として米食偏重の壁は破れずいも類、豆類、動物性食品、野菜類はすべて減少した。

また前年度飛躍的伸びを示した、卵類、乳類、柑橘類・トマト等の食品が逆に減少を示し、消費者世帯に比べてその食糧消費水準は一段と低い状態にある。

消費者世帯にあっては、この数年かなり改善の傾向にあったが本年度は前年に比べて穀類は大幅に減少し、魚介類を除く動物性食品は獣鳥肉類、卵類、乳類ともに順調に伸びている。

しかし、油脂類は大差なく豆類、その他野菜類はかえって減少を示している。

1) 全国1人1日当り食品摂取量

次に概括的に最近数年間における主要食品群の消費推移をみると、まず昭和32年を100とした場合第4図の如く、この数年最も大きい伸びを示したものは魚介類を除く動物性食品で乳類、卵類、獣鳥肉類等の畜産食品は激増しており、乳類は91%、卵類76.6%、獣鳥肉類40%の増加を示している。

次いでその他の果実が40.7%、油脂類37.5%といずれも増加しており、食糧構成は大きく改善されてきている。

またこの数年間に最も減少の著しいのは大麦、甘藷、大豆等で大麦50%、甘藷44%、大豆29%と減少し、馬鈴薯、その他のいも、その他の豆類、緑黄色野菜等の食品も同じく下降状態を示している。

一方、米の摂取量は3.5%と僅かながらも増加し、米食依存の傾向はまだ改善されていない。

次に各食品群別に更に消費内容を詳細に検討してみよう。

(イ) 穀 類

所得水準の向上によって、穀類の摂取量は年々減少の傾向をたどっているが、この数年の動きをみても昭和32年の摂取量に対して1.7%と若干減少している。このことは国民の食生活が穀類を主体とする主食本位から副食本位の食事形態へと漸次抜けだしつつあることを意味するものであろう。

次に前年に比較すると穀類の総量は450グラムで0.6%の減少を示し、その構成は米が1.5%増えて米食率はたかまったが、大麦、小麦、雑穀等は減少している。

米

第8表

穀 類 の 消 費 推 移

	30年	32年	34年	35年	36年	対前年比
総数	479.6	458.2	462.4	452.6	450.0	-0.6
米	346.6	351.2	364.4	358.4	363.6	+1.5
大麦	60.0	45.2	33.3	28.2	22.6	-19.9
小麦	68.3	59.7	63.7	65.1	63.4	-2.6
雑穀	4.7	2.1	0.9	1.0	0.5	-50.0

国民の食生活が穀類から畜産食品、油脂、果実類へと移行しつつあるにもかかわらず、穀類の消費構成の中であって、米の摂取量が増大していることは、栄養的に余り好ましくない現象である。

本年における米の摂取量は363.6グラムで、前年に比べ1.5%増えており、また季節別にみると2月が379.5グラムで最も高く8月は346.5グラムで最も低い。

大 麦

大麦は澱粉性食品の中では、栄養上の価値のすぐれたものであるが、昭和年32頃から年々大きく減少しつつあり、本年の摂取量は22.6グラムで32年に比較して50%と著しい減少を示している。

なお、前年に比べても19.9%減少し、季節別には5月が25.8グラムで最も高く、次いで11月、8月、2月の順に低くなり他の食品と異った消費傾向をみせている。

小 麦

最近米の豊作が平年化するにつれて米の過食の傾向がみられ戦後大幅に伸びた粉食は一步後退し、穀類中に占める小麦の割合も伸び悩みの状態にある。

すなわち、本年の摂取量は63.4グラムで前年に比べて2.6%も減少している。なお、季節別には、11月2月が65.0グラムで最も高く、5月は61.4グラムで最も低い。

雑 穀

穀類としての雑穀の消費は米の豊作や嗜好の点からも、今後食品として伸びる見込は殆んど期待できない現状にある。

本年の摂取量は0.5グラムで前年に比べ50%減となっている。

(口) い も 類

いも類の本年度の摂取量は64.4グラムで、前年と比べると横ばい状態にあるが食生活水準の上昇ははじめた32年頃に比べると20%程減少している。いも類の対前年比をみると甘藷は前年に比べて10%減少したが馬鈴薯、その他のいも類は若干増加を示しており、これらは今後とも副食としてかなり伸びるものと期待される。

第9表

い も 類 の 消 費 推 移

	30年	32年	34年	35年	36年	対前年比
総 数	80.8	78.0	66.7	64.4	64.4	0
甘 藷	33.7	27.5	18.5	17.1	15.4	-10.0
馬 鈴 薯	33.6	29.3	26.3	27.3	28.3	+ 3.7
その他のいも加工品	13.5	11.2	21.9	20.3	20.7	+ 2.0

甘 藷

甘藷の摂取量は15.4グラムで昭和32年に比べて44%も減少し、また前年に比べても10%減っており、今後も増量は余り期待できない。

季節的な動きをみると11月が34.7グラムで最も高く次いで2月は13.6グラム、最低は8月で4グラムと低く季節差が比較的大きい。

馬 鈴 薯

馬鈴薯の摂取量は28.3グラムで前年に比べて3.7%と僅かながら増加しており、また季節的には甘藷と

全く逆に 8 月が41.4グラムで最も高く次いで 5 月が29.1グラム、最低の11月が20.8グラムとなっている。

その他のいも加工品

その他のいも加工品の摂取量は20.7グラムで前年に比べて僅かながら増えている。季節的には11月が21.2グラムで最も高く、最低は8月の1.7グラムで季節差が大きい。

(ハ) 砂糖類

砂糖類の摂取量は12.9グラムで前年に比べ若干増加がみられるが、この数年は余り大きな変動はみられない。

第10表 砂糖、油脂類の消費推移 (単位：g)

	30年	32年	34年	35年	36年	対前年比
砂糖類	15.8	10.3	12.5	12.3	12.9	+ 4.9
油脂類	4.4	4.8	5.8	6.1	6.6	+ 8.2

(ニ) 油脂類

油脂類の摂取量はこの数年順調に増加しており、他の食品群に比べ最も大きい伸びを示している。

また本年の摂取量は6.6グラムで前年に比べて8.2%増加している。

(ホ) 豆類

豆類の摂取量は69.4グラムで前年に比べて2.5%と僅かながらの減少がみられる。

品目別にみると漸減の傾向にあった大豆、味噌は前年摂取量と変わらず、大豆製品、その他の豆類は4%6.2%と減少している。季節による摂取量の動きをみると2月が77.1グラムで最も高く次いで11月が高く、8月は60.8グラムで最も低い。

第11表 豆類の消費推移 (単位：g)

	30年	32年	34年	35年	36年	対前年比
総数	67.3	69.9	69.9	71.2	69.4	- 2.5
大豆	2.1	2.1	1.6	1.5	1.5	0
味噌	28.8	27.5	28.0	26.0	26.1	+ 0.4
大豆製品	29.4	34.0	34.5	37.3	35.8	- 4.0
その他の豆類	7.0	6.3	5.9	6.4	6.0	- 6.2

(ヘ) 動物性食品

動物性食品の摂取量は152.7グラムで前年に比べて3.6%の増加がみられるが、これを品目別にみると前年に5.9%の増加を示した魚介類の摂取量は本年は4%減少し、またこの数年激増しつつあった獣鳥肉類、卵類は前年に比し、2.3%、19.6%と順調に伸びているが、乳類は7%と伸び悩みの傾向がみられる。

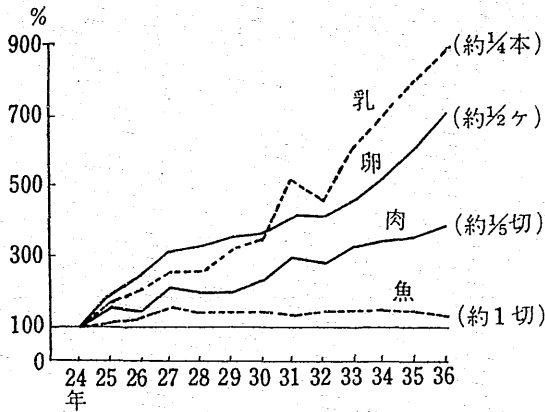
魚介類

魚介類の摂取量は73.8グラムで前年の摂取量76.9グラムに比べて4%減少している。

これを品目別にみると乾物、加工品は最近の食生活の洋風化の影響をうけて年々増加しているが、生物は貯蔵性に欠けること、調理に手間のかかること、嗜好の変化等によって消費量は減少する傾向にある。

季節別にみると11月が82.4グラムで最も高く次いで2月、5月が高く8月は62.9グラムで最も低い。

第4図 動物性食品消費量の推移
(昭和24年=100)



卵 類

卵類の摂取量は22.6グラムで前年の摂取量18.9グラムに比べて19.6%と畜産食品中最も大きい伸びをみせている。

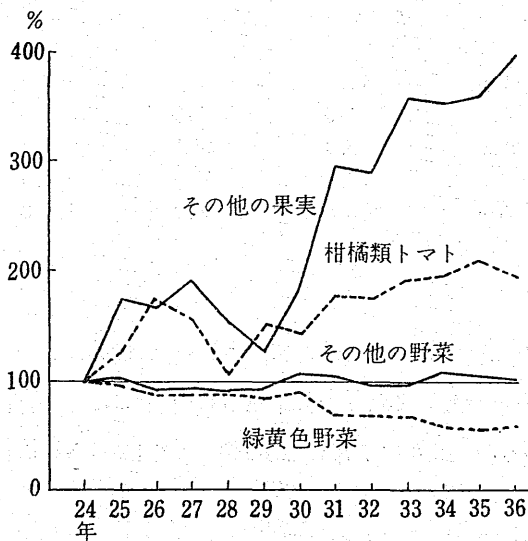
季節別にみると5月が24.5グラムで最も高く次いで2月、8月が高く、11月は20.8グラムで最も低い。

乳 類

乳類の摂取量は35.2グラムで前年の摂取量に比べて7%増加し、その大半は生乳として消費されており、季節別にみると8月が41.6グラムで最も高く、次いで5月、11月が高く、最低は2月で29.6グラムである。

(ト) 野 菜 類

第5図 野菜、果実消費量の推移
(昭和24年=100)



獣 鳥 肉 類

最近は所得水準の上昇と食生活様式の変化によって畜産食品は急激に増加しているが、そのうち獣鳥肉類の本年摂取量は21.0グラムで前年に比べ12.3%と大きく増加している。

その内訳は牛肉4.7グラムで前年より減少し豚肉、その他肉類加工品が5.6グラム、10.8グラムと、それぞれ増加を示している。

季節別にみると2月が24.8グラムで最も高く次いで11月、8月が高く5月は18.9グラムと最も低く、季節的変動は割合に大きい。

野菜類の消費はここ数年来95グラム～100グラムの線を維持している。

この需要傾向をみると栄養価の高い緑黄色野菜は年々減少し、白色野菜が増加するなど好ましくない状態にあったが、本年は緑黄色野菜が40.0グラムで前年に比べて2.6%と若干増加を示したことが目立っている。

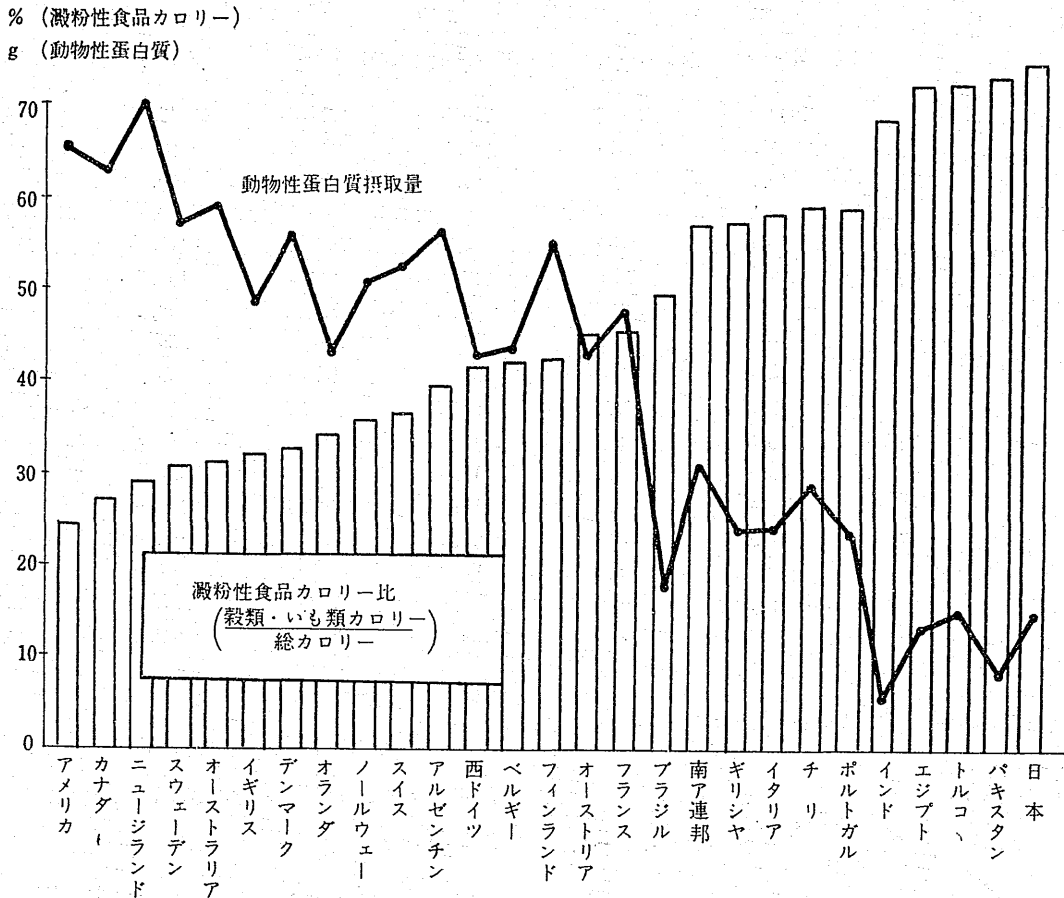
しかし、その他の野菜は119.6グラムで前年に比べ3.2%減少している。

次に野菜類消費の内訳をみると緑黄色野菜40.0グラム中にニンジン7.8グラム、ほうれん草9.8グラム、かぼちや7.3グラム、その他15.2グラムとなっており、前年に比べてニンジン、

ほうれん草は若干減少し、かぼちや、その他が僅かながら増加している。

またその他の野菜類ではだいこん20.8グラム、きやべつ13.1グラム、はくさい14.1グラム、その他71.6グラムとなっており、前年に比べていずれも減少している。

第6図 国際比較からみた日本人の栄養状態



(注) FAO : Food Supply Time Series 1960年版により作成

(チ) 果実類

果実類の摂取量は84.3グラムで前年の摂取量に比べて5.9%増加している。

その内訳は柑橘類、トマトが22.8グラムで前年より11.0%と減少を示し、その他の果実は61.5グラムで13.7%増加している。

季節別には柑橘類、トマトは8月が32.3グラムで最も高く、5月は16.2グラムで最も低い。

その他の果実類は8月が116.5グラムで最も高く、2月は25.6グラムで最も低く季節的な変動が大きい。

2) 業態別1人1日当り食品摂取量

食品の摂取状況を業態別に比較してみると、一般に生産者世帯は摂取食品の多くを自家生産物でまかなっている関係から植物性食品に依存する度合が大きく、食品の種類、質的内容が消費者世帯に比べて著しく低水準にある。

また生産者世帯にあっては35年度に幾分向上のけはいをみせたのであるが、本年は米の摂取量が前年よりも4.3%増加する反面、いも類、豆類、動物性食品、野菜類等はすべて減少するなど好ましくない傾向にある。

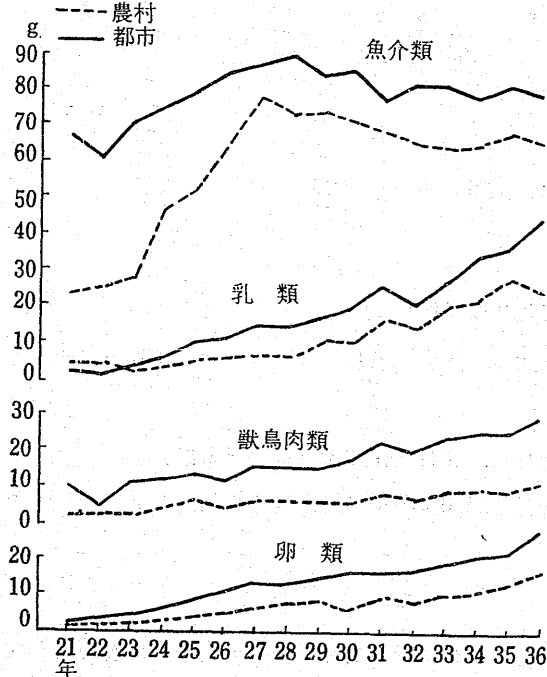
消費者世帯はこの数年停滞気味であったが本年は、米の摂取量は前年より1.8%減少するとともにその

第12表

主要食品の業態別摂取量

食品群別	摂 取 量			対 前 年 比		
	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯
米	399.4	340.5	336.9	104.3	98.2	99.7
小麦	36.5	11.1	41.2	82.4	64.2	85.3
大麦	49.2	74.0	56.8	94.4	100.1	114.1
甘藷	23.0	8.6	29.0	89.5	80.4	82.6
馬鈴薯	31.2	25.1	42.4	87.2	111.6	156.5
砂糖	13.3	12.6	12.4	104.7	104.1	95.4
油脂	5.6	7.3	6.0	100.0	114.1	113.2
味噌	30.2	23.2	26.7	98.4	100.0	94.7
大豆製品	29.4	40.3	36.7	105.0	93.9	111.9
魚介類	65.9	78.6	84.1	97.2	96.3	103.6
肉類	10.3	29.4	12.5	114.4	118.5	108.7
卵類	15.5	28.1	18.0	118.3	124.3	127.7
乳類	24.0	44.6	19.5	88.6	119.6	89.0
緑黄色野菜	46.8	34.9	43.5	97.5	102.9	108.5
その他の野菜	133.1	108.9	130.1	93.8	97.4	94.2
柑橘類・トマト	13.7	30.2	14.1	77.8	98.7	71.6
その他の果実	63.5	61.4	46.1	123.1	108.3	111.9

第7図 都市と農村の動物性食品摂取量の比較



(注) 昭和36年度国民栄養調査成績による

他食品ではいも類、動物性食品、緑黄色野菜、果実類が増加を示し食糧構成は質的にも若干改善されている。

特に消費者世帯の中でも事業経営者世帯、常用勤労者世帯は消費内容もバランスがとれ、また加工食品や、嗜好食品等も著しく増加し、その食糧構成は最もすぐれている。

(イ) 生産者世帯

生産者世帯の食糧構成は前年度に若干改善の兆がみられたのであるが、本年は全体に伸び悩み一歩後退した摂取状況を示している。

すなわち穀類の摂取量は485.7グラムで前年より6.4%増え、これを品目別にみると大麦は17.6%、小麦は5.6%減少しているがその反面米の摂取量は399.4グラムと前年に比べて4.3%増加するなど粉食が伸び悩む傾向にある。

いも類の摂取量は75.6グラムで前年より7.5%減少し、油脂類は前年に大きい摂取増がみられたのであるが、本年の摂取量は5.6グラムで前年と変わらない。

豆類の摂取量は68.2グラムで僅かに減少している。

動物性食品の摂取量は115.6グラムで前年に比べ1.1%と若干減少し、品目別にみると獣鳥肉類、卵類

は前年に比べ14.4%、18.3%の増加がみられるが魚介類、乳類は、2.8%、11.4%と減少している。

また、本年はその他の果実類を除く緑黄色野菜、その他の野菜類、柑橘類、トマト等がいずれも2.5%、6.2%、22.2%と減少していることが目立っている。

(口) 消費者世帯

消費者世帯は他の世帯群に比べ食糧構成は最も上位にあり、穀類の摂取量は425.8グラムで前年に比べ2.8%減少し、そのうち米の摂取量は340.5グラムでこれも1.8%と若干減少している。

いも類の摂取量は53.8グラムで前年と大差なく他の世帯群に比べいも類の摂取量は最も低い。

豆類の摂取量は70.1グラムで、前年に比べ4%減少し、特に大豆製品の減少が目立っている。

動物性食品はいずれも他の業態を上回っており、本年の摂取量は180.7グラムで前年に比べ8.7%増加している。

その内訳は魚介類78.6グラムで前年に比べ3.7%減少したが獣鳥肉類は、29.4グラム、卵類28.1グラム、乳類44.6グラムで前年に比べ18.5%、24.3%、19.6%と大きく伸びている。

また、野菜、果実類の摂取状況をみると緑黄色野菜の摂取量は34.9グラム、その他の野菜は108.9グラムで他の業態を下まわっているが、柑橘類、トマトの消費は30.2グラムで他の業態の2倍以上の摂取量と

第13表

食品群別摂取量（消費者世帯細分・36年5月）

食 品 群 別			事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯
	米		354.0	331.5	365.6	341.8
大	麦		14.8	11.3	27.9	20.6
小	麦		71.8	73.7	56.9	63.9
甘	藪		3.7	3.1	3.7	5.8
馬	鈴	薯	30.2	28.9	37.2	30.0
砂		糖	13.0	14.1	11.1	14.1
油		脂	6.9	8.6	4.6	6.8
味		噌	24.6	22.7	25.9	26.3
大	豆	製	37.6	35.3	37.2	36.6
魚	介	類	81.0	75.1	72.0	74.4
肉		類	27.1	28.7	13.5	21.4
卵		類	26.6	32.2	19.4	28.0
乳		類	45.4	46.8	18.4	39.7
緑	黄色	野菜	34.3	33.4	35.4	33.7
そ	他の	野菜	121.6	119.5	112.0	112.7
柑	橘類・ト	マ	21.3	24.6	8.2	19.8
そ	他の	果実	37.7	42.6	19.9	38.3

なっている。

以上のように消費者世帯の食生活水準は生産者世帯をはるかに上回る水準を示している。

次に5月調査について消費者世帯を細分した各業態の食品摂取量の比較および対前年比について検討してみると、従来は常用勤労者世帯の食糧構成が最もすぐれており、これに事業経営者世帯が次いでいたのであるが、この1～2年事業経営者世帯は目立って向上し、本年は常用勤労者世帯と事業経営者世帯は殆んど優劣をつけ難いまでに接近してきている。

しかし、日雇・家内労働者世帯では畜産食品の利用度が高まってきているとはいえ食糧構成は他の業態

に比較して極めて低水準にある。

事業経営者世帯

穀類の摂取量は441.4グラムで、前年に比べて2.5%減少し米も僅かながら減少を示している。

いも類は47.9グラムで、前年より6.9%増え特に馬鈴薯が30.2グラムで前年に比べ19.4%増えたのが目立っている。

油脂類は6.9グラムで前年より21.1%増え、動物性食品も総量は180.1グラムで前年より8.2%増加しその内訳についてみると魚介類は1.6%と若干減少したが獣鳥肉類27.1グラム、卵類26.6グラム、乳類45.4グラムでそれぞれ14.8%、20.9%、18.2%といずれも大きい伸びを示している。

また、柑橘類・トマトは21.3グラムで13.3%、その他の野菜類は121.6グラムで1.8%と増え、その他の果実類も37.7グラムで45.0%と最も大きい伸びを示している。

常用勤労者世帯

穀類の摂取量は416.8グラムで全業態中最も少ない。

いも類は45.0グラムで前年と大差なく、豆類は64.1グラムで前年に比べ4.2%減少している。

油脂類は8.6グラムで前年に比べ11.7%、動物性食品も総量で6.9%増加し、その内訳をみると魚介類は75.1グラムで5.4%減少したが、獣鳥肉類28.7グラム、卵類32.2グラム、乳類46.8グラムでいずれも前年の摂取量を大幅に上回っている。

次いで野菜類についてみると、緑黄色野菜の摂取量は33.4グラムで前年と大差なく、柑橘類・トマトは24.6グラムで7.0%、その他の野菜119.5グラムで、1.4%、その他果実類42.6グラムで48.4%と増加している。

日雇・家内労働者世帯

穀類の摂取量は450.4グラムで業態中最も多くそのうち米は365.6グラムで摂取量の多いことが目立っている。

いも類の摂取量も54.7グラムで、業態中最も多くこの業態はまだまだ植物性食品に対する依存度の高いことを示している。

油脂類の摂取量は4.6グラムで前年に比べ9.5%増加し豆類は69.6グラムで8.1%増加している。動物性食品も総量は123.3グラムで3.4%減少したが、その内訳をみると魚介類が72.0グラムで前年に比べ12.4%減少し、獣鳥肉類は13.5グラムで大差なく、卵類19.4グラム、乳類18.4グラムで他業態に比べて著しく低水準にある。

また、緑黄色野菜は35.4グラムで前年に比べ13.5%増加したが、その他の野菜類は112.0グラムで5.9%減少し、柑橘類・トマトも8.2グラムで8.1%減少するなど全体的には野菜類の摂取量も伸び悩みの傾向にある。

その他の消費者世帯

穀類の摂取量は426.9グラム、いも類46.3グラムで常用勤労者世帯に次いで少なく油脂類の摂取量も6.8グラムで前年に比べ17.2%増え、豆類も70.1グラムで若干増加がみられる。

次いで動物性食品についてみると、総量は163.5グラムで前年に比べ7.1%増加している。その内訳をみると魚介類が74.4グラムで11.5%の減少がみられるものの獣鳥肉類は21.4グラムで5.9%、卵類28.0グ

ラムで30.8%, 乳類39.7グラムで47.6%といずれも大幅に増加するなどこの世帯の食糧構成は相当に改善されてきている。

次に野菜類についてみると緑黄色野菜は33.7グラムで8.7%増加しその他の果実類も38.3グラムで87.7%と大幅に伸びを示したがその他の野菜は112.7グラムで、11.7%, 柑橘類・トマト19.8グラムで8.8%と減少している。

(ハ) その他の世帯

この世帯は、生産、消費のいずれにも分類されない世帯をとりまとめたものであるため職業形態からみるときわめて雑多であり、生産者世帯、消費者世帯に比べて年度別の変動が激しい。

穀類の摂取量は435.4グラムで生産者世帯に次いで多く、いも類は92.2グラムで業態中最も多い。

油脂類は6.0グラム、豆類70.6グラム、動物性食品134.2グラムで13.2%, 1.7%, 4.4%といずれも増加しているが動物性食品の内訳をみると獣鳥肉類12.5グラム、卵類18.0グラム、乳類19.5グラムとなっている。野菜類では緑黄色野菜、その他の果実類は若干増えているが、柑橘類・トマト、その他の野菜類は減少し前年より改善されているが依然として消費者世帯に比べ立遅れている。

3 食品群別栄養構成

前項までは、各栄養素の摂取量と、これを供給する食品の摂取量について記述してきたが、更に食品群別に熱量および各栄養素の供給構成について検討してみよう。

1) 熱 量

昭和36年度における熱量の摂取構成をみると、総カロリーの69.7%を穀類から摂取しており、これを年次別にみると30年75.0%, 32年72.7%, 35年70.6%と穀類の比率は低下しているものの、昭和34年に栄養審議会が策定した37年の目標値である66.4%に下げるまでには程遠く、また穀類中の米の占める割合は58.2%で前年より増加の傾向をみせている。

しかも、大麦、小麦、雑穀等の占める割合は前年に比べ更に低下しており、国民の食生活は米食偏重の傾向がますます強くなっていることがうかがえるのである。いも類は2.7%で前年と変わらず、豆類は5.1%で僅かに減少している。

第14表

熱量の摂取構成(年次推移)

単位=%

	総 数	穀 類	いも類	油脂類	豆 類	動 物 性 食 品	野 果 菜 実	砂 糖 類	そ の 他
昭 和 28 年	100.0	75.5	3.6	1.8	5.8	7.3	3.6	2.3	0.1
昭 和 30 年	100.0	75.0	3.8	1.8	5.3	7.5	3.7	2.8	0.1
昭 和 32 年	100.0	72.2	3.5	2.0	5.4	8.1	3.2	1.9	2.9
昭 和 34 年	100.0	71.5	2.8	2.3	5.2	8.7	4.4	2.3	3.0
昭 和 36 年	100.0	69.7	2.7	2.6	5.1	9.8	4.2	2.4	3.5

なお最近摂取量が増加している油脂類についてみると総カロリーの僅か2.6%を占めるにすぎず今後とも大幅な向上が望まれる。

次いで動物性食品についてみると9.8%で前年の9.4%に比べ若干増えているがその内訳についてみる